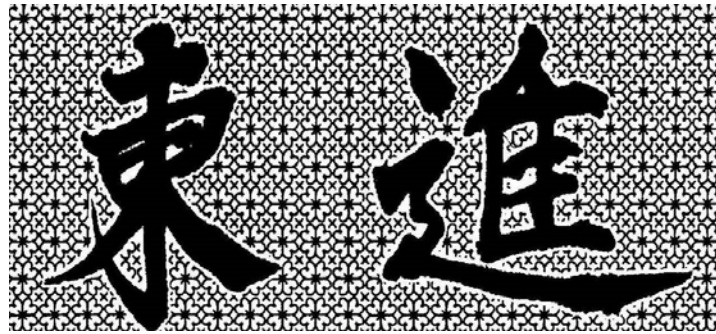


第60号

令和2年
11月1日

題字

植木 満
初代東進会会長



発行所

土浦一高東進会
茨城県立土浦一高
進修同窓会東京支部

発行人

東進会会長 飯塚 哲哉

事務局 〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-4 砂防会館別館6階
宮崎法律事務所 気付 東進会事務局
TEL (FAX) 03-5421-5321
E-mail: toshinkaisecretary@gmail.com

ホームページ <https://to-shin-kai.jimdo.com/>



「実りの秋」

提供 青木 功 (フォトグラファー 昭和50年卒)

■ 2020年(令和2年)

東進会通常総会開催のご報告

東進会・企画委員会

■ リレー放談 (第10回)

「旅の思い出」

安井 恵子(昭和41年卒)

■ デジタル技術の恩恵を

もっと体感してみよう!

AI サーモグラフ、母校へ寄贈のわけ

東進会会長 飯塚 哲哉

(昭和41年卒)

2020年(令和2年)

東進会通常総会開催のご報告

毎年6月に開催しております東進会通常総会は、今年は新型コロナウイルス感染症拡大が収まらない状況を踏まえて、例年の予定を変更し、オンライン会議形式の総会となりました。4月上旬、緊急事態宣言が全国に拡大される中、役員会で協議した結果、総会と併せて実施していた恒例の会員交流の懇親会や講演会の開催を断念することといたしました。

できるだけ感染リスクを避けるために、書面による議決権行使や委任状による参加を事前にお願ひして、総会の形式はインターネットを活用した初めてのオンラインによる開催となりました。

6月11日午後6時半より、会長による開会宣言の後、審議事項の説明、オンライン参加者からの質疑や近況報告があり、審議事項については書面による賛成票を含めて全会一致で原案通り可決となりました。

- ・ 当日の参加状況は次の通りです。
- ・ オンライン参加者 9名
- ・ 書面による議決権行使 50名
- ・ 賛成46名 白票4名
- ・ 委任状提出 97名

① 2019年度決算報告

『審議事項』

- ② 2020年度予算案
- ③ 2020年度役員改選案

初めてのオンライン総会でしたが、会員の皆様のご協力により滞りなく進行することができましたことをご報告させていただきますとともに、会員の皆様並びに役員各位に感謝を申し上げます。

なお、9月15日現在の年会費並びに寄付金の納入状況は次の通りとなっております。重ねて会員の皆様のご協力にご支援に感謝を申し上げます。

- ・ 年会費納入の方 184名
- ・ 552,000円
- ・ 343,000円
- ・ 80名

東進会・企画委員会

**デジタル技術の恩恵を
もつと体験してみよう!**
AIサーモグラフ、母校へ寄贈のわけ
東進会会長 飯塚哲哉(昭和41年卒)

新型コロナウイルスが全世界で猛威をふるい、人々の生活に大きな影響を与え、文化活動、経済活動を麻痺させて既に半年程が経過し、更に長期化の様相を呈している中、去る6月3日土浦一高にコロナ禍対応の為に弊社製品のAIサーモグラフを進呈した。弊社グループはコロナ禍に対応して、多くの人が集まる駅、病院、高層ビル、学校、野球場、競技場、遊戯施設など向けに、毎秒10名以上の顔認証と

同時に±0.2℃の高精度で体温測定の出来るシステムの提供を2月から開始していた。AI技術を駆使して、検温と同時に数万名の個人の顔も認知照合できる機能を持った製品である。これを、登校再開に向けて準備中の母校に提供してはどうかと思いついたのは5月下旬のことである。早速、植木校長先生にお問い合わせした所、数日後に快諾を頂戴した。当日は植木校長のご尽力で主要マスコミ5社もが取材に参加頂いた(写真1、2)。

何故、このようなことを思い立ったかをお話したい。日本は寄附の発想が貧弱で、まず売名行為とか節税ととられることが常である。こうした意図が全く無いと言えば正確ではないかもしれない。事実、校長先生の人脈の広さもあり県内だけでも多くの御問合せ、注文を頂いた。しかしそうした目的だけなら他に方法が無いわけではない。

もつとも強い動機は、日本という国のデジタル技術の活用、所謂DXの大幅な遅れへの焦燥感だ。今回のコロナ禍で、マイナンバーカードが役に立たず結局手作業で10万円の補助金支給に数カ月要することになった(他の先進国は数日で済む)ことなどで露呈した実態だが、実はその歴史は決して短くない。



写真1 贈呈式(毎日新聞社提供)。

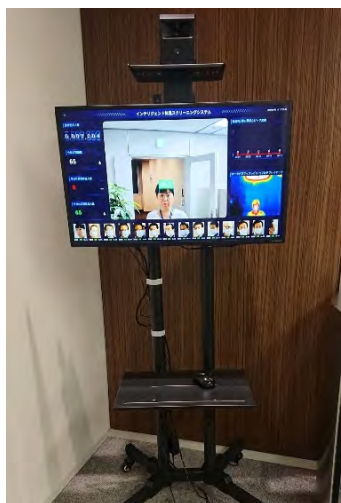


写真2 寄贈されたAI顔認証機能付きサーモグラフ

表1はビジネススクールIMDの提供する2018〜2019年のデジタル技術活用度の順位である。1位は米国、2位はシンガポール、3位はスウェーデン、続く上位には欧州勢が並ぶ。日本は23位と大きく後れ、アジア勢と比較しても劣後している。韓国は10位、中国は22位で日本より上位に居る。順位自体が問題なのではなく、利便性の実態だ。例えば日本では、引越しをすると、7か所の役所に出かけ、13種類の書類を提出しなければならぬが、韓国はネットで1回の申告で済むと言う落差だ。既に韓国に一人当たりのGDPで追い抜かれたことと

も決して無関係ではない。日本は先進国としては労働生産性の低い国なのだ。

2019	Country	2018	Change
1	USA	1	-
2	Singapore	2	-
3	Sweden	3	-
4	Denmark	4	-
5	Switzerland	5	-
6	Netherlands	9	+3
7	Finland	7	-
8	Hong Kong SAR	11	+3
9	Norway	6	-3
10	Korea Rep.	14	+4
11	Canada	8	-3
12	UAE	17	+5
13	Taiwan, China	16	+3
14	Australia	13	-1
15	United Kingdom	10	-5
16	Israel	12	-4
17	Germany	18	+1
18	New Zealand	19	+1
19	Ireland	20	+1
20	Austria	15	-5
21	Luxembourg	24	+3
22	China	30	+8
23	Japan	22	-1
24	France	26	+2
25	Belgium	23	-2
26	Malaysia	27	+1
27	Iceland	21	-6
28	Spain	31	+3
29	Estonia	25	-4
30	Lithuania	29	-1
31	Qatar	28	-3
32	Slovenia	34	+2

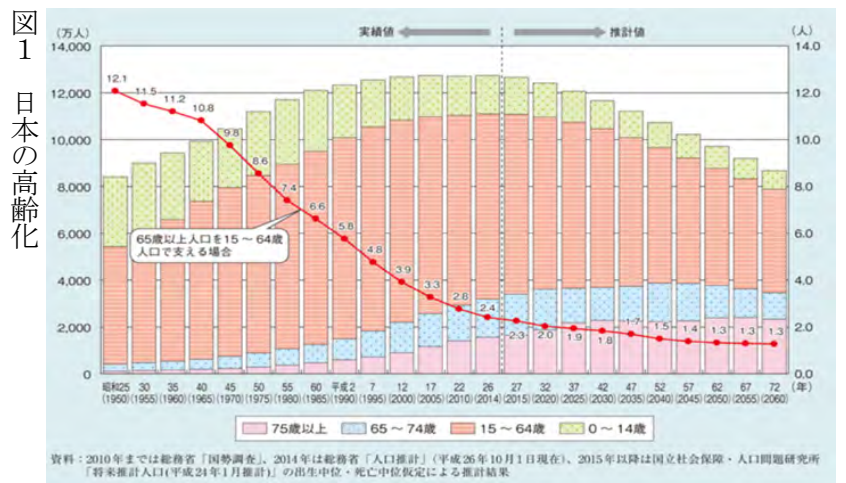
表1 スイスIMDによる19年と18年のデジタル活用度ランキング

折しも発足したばかりの菅新政権はデジタル庁なるものを作って改革を図ろうとしている。期待は大きいですが、既に2001年に森内閣で「e-Japan 戦略」、2006年に小泉内閣で「IT新改革戦略」、2013年に安倍内閣で「世界最先端IT国家創造宣言」を行って来たのだが、全てが未達で今の状態がある。デジタル技術の利用遅れの原因は根が深い。日本は1980年代にはエレクトロニクス産業が世界をリードしていた。その核となる半導体は世界のトップシェアを取る地位にあった。それが日米貿易摩擦への対応を誤り、地盤沈下を30年も継続してしまつた。日本を支えたクルマと電機の大産業の後者が大きく地位を下げってしまった。エレクトロニクスと半導体の凋落はその後のコンピュータサイエンス、通信産業、データ産業、AI技術に繋がる産業革新に圧倒的な不利な条件となつた。

1960年代に日本はなんと米国の2倍の電子工学系の卒業生を生み続けた。これが70、80年代の日本の半導体、エレクトロニクスの世界制覇に繋がった。しかし1980年代になって、コンピュータサイエンス、情報科学系の学生数は米国や中国の実に10分の1から12分の1に過ぎなかった。これはその後の日本のIT競争力を失わせることに繋がった。

ゲーム好きのスマホネイティブはいても、情報科学の人材が枯渇している。津々浦々の小中高でITを駆使した教育を担う先生が不足している。コロナ禍でも遠隔教育が容易に出来ない。タブレットを活用した教育への動きは数年前にかなり低調になっている。「端末を買えない家庭があるから出来ない」は本当の理由ではない。通信手段や端末は貸与、支給が当然ではないか。オンライン診療も鉄壁の抵抗勢力によつて伸展しない。もはや文化の領域に達している。

日本は少子高齢化という課題で世界の最先端を走りながら、一方で突出してサービス産業などの効率の低い国家として著名である。これから少子高齢化は更に深刻化し、2030年には32%が高齢者となり、一人の高齢者を1.8人の働き手で支えることになる(図1)。この課題を解決するためには科学技術を駆使し、人工知能AIやIoTを活用したシステムを使いこなすのが最低限必要なことである。頼りの外国人労働者も貧しくなった国などへ働きに来たいとは思わない。



こうした課題に立ち向かってくれるのはこれから多くの老人を背負い、GDPの2倍にも膨れた国の借金の返済を押し付けられた若者であるはずだ。その為にはまずは若者にデジタル技術の心地よさ・便利さを体感してもらい、自分もその担い手になってみようかという熱意や好奇心をもって欲しいと思つた次第である。元々土浦一高は多くの優秀な理系の学生を送り出して来た。学生たちの多くがこれからのバイオ医療、量子技術や更に最先端の技術の研究や社会化に参加して欲しいものである。

【編集後記】

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、6月の東進会総会、9月のアカンサスクラブ講演会(講演内容は前号に掲載済み)は、オンラインで開催されました。総会懇親会も中止になりました。出席者の顔写真、懇親会の様子等をお届けすることができなくなりましたので、会報「東進」は、通常の全8ページから全4ページに変更させていただきました。

21年にわたり、毎月欠かさることなく開かれてきた謳酔会も、3月から中断を余儀なくされています。毎回楽しみにしていた参加者の皆様には本当に残念ですが、気兼ねなく集まって開催できるまで、もうしばらくお待ちください。12月のアカンサスクラブ講演会も、今のところオンライン開催の予定です。多くの皆様のオンラインでの参加をお待ちしています。

先のことを考えると、今後どうやって生きて行ったらよいか、不安になってしましますが、目の前にあることをこなし、前を向いて生きていきたいと思っています。コロナとともに生きていく新しい生き方を模索しつつ、いつの日か、感染を恐れることなく、各種行事が行えることを信じています。

(H)

第10回リレー放談
「旅の思い出」
安井 恵子(昭和41年卒)

この10年あまりリユックサックを背負って、国内あちらこちらを一人旅している。喧騒を離れ、好きな本を片手に、時にはビールひと缶を開けて、電車で揺られ、居眠りもしつつ、と思うのだが、実際は車窓の眺めに見惚れ、時にはスマホで写真を撮って友人達に「写真を送るのに忙しく、なかなか思うようなんびり旅にならない。旅先で目にした感動を共感して欲しくて、つい友人達に連絡を入れてしまう。日常から離れられない。これもまた旅かも知れない。旅するテーマは歴史、風景、建造物、食と様々。旅先で接する地元の人々との会話も楽しい。旅先で地元の人や旅人から情報を貰い、また新たな旅を広げるヒントとなる。

COVID-19の感染を恐れ、ここ1年以上旅に出していない。旅心が薄れていくのでは？おつこうになり、老いてしまうのでは？と懸念する。

さて、昨年訪れた北海道タウシユベツ川橋梁を思い出して書きましょう。その名を知ったのは3年前。それが何なのか？どこにあるのか？どう行けば良いのか？漠然としていて、実際の計画も思いつかなかった。東日本JRの安い切符が使える時期を迎え、調べてやっと計画をした。現地ガイドセンターのツアー予約が満員というのを、「二人くらいいいでしょう？」と強引に頼む。

帯広からバスで1時間40分、糠平温泉へ。翌朝、宿近くのガイドセンター5時

半集合。ガイドセンター用意の長靴に履き替える。ツアー客はセンターの乗用車に分乗。大手ツアー客が主であった。個人で出かけて行くのとは違い、ツアー会社の観光地情報には負ける。山道を走ること15分、途中「これは熊の糞です。」と路肩の黒い物をガイドが示す。車を降り、数分歩く。木が転がる草の道。「ここは満水時は水の中です。」と言われてもピンと来ない。草原の丘に出て、目に入ったのは、広い谷にかかる白いアーチの連なりだった。



「旧国鉄士幌線タウシユベツ川橋梁」

(写真左)である。かつて木材輸送に使われた士幌線(1925-1987)のコンクリートアーチ橋梁群の中でも特に代表的な橋。谷に流れる細い小川は勿論、糠平ダムの水位が上がる6月頃から10月頃まで満水の糠平湖の中に橋は沈み、ダムの水の少ない1月頃に凍結した湖面に橋が姿を表すとのこと。谷に降りて橋梁越しに見える山々も美しい。ウペペサンケ山、ニペツ山とのこと。待望の橋梁見物後、知り合ったツアー客一人と近

くの橋梁も訪ねた。ひがし大雪自然館や上士幌町鉄道資料館も訪ね、旧士幌線の歴史を見学した。

アーチ橋が好きで、出掛けている。長崎の眼鏡橋は有名であるが、予想より小さくそれほど感激しなかった。熊本県上益城郡山都町の通潤橋を5年前に訪ねた。新聞記事で知って訪ねたいと思っていた。博多に用事で出掛け、用事が終わって山口に向かう日が、丁度通潤橋(写真左)の放水される週末であると気づき、チケットを手配して2日前に居た熊本に戻ったのである。



熊本市内バスターミナルからバスで1時間半。黄金色の田んぼの中に通潤橋がそびえていた。「通潤橋」嘉永7年(1854)に架けられた石造単アーチ橋。橋長78m、幅6.3m、高さ20m。週末の1日に15分しか放水しないというので、それまで石橋の上を歩きながらその時を待つ。時間となり、橋中央から両側に放水が始まった。用水管内の泥砂利を除く

為、橋に負担をかけない為、両側から放水すること。滝とは違うのだが、その豪壮な眺めをカメラに収めるべく15分間歩き回った。感激の思い出である。

秋の奈良正倉院展に行くついでに、近場を訪ねている。岩国の錦帯橋も名所であるが、奈良行前に訪ね、その後、城巡りツアーでも再訪して堪能した。岩国城下の宝物館は、甲冑等保存状態が良く2度行ってしまった。函館の端汐首町の旧戸井線のアーチ橋も訪ねた。旅先では地元のバスか歩きが主だが、ここは知り合いのタクシーで連れて行って貰った。軍事物資および兵員輸送目的で昭和11年に建設を開始し、資材不足で昭和18年に工事を中断した、未完の鉄道の遺構である。朽ちつつあるコンクリートアーチを見上げていると、戦時中の歴史に思いを馳せ、感慨深い。群馬県安中松井田町の碓氷第三橋梁(めがね橋)も歴史的遺構で感激した。

京都の南禅寺水路閣も何度も訪ねている好きな所。水路閣から山道を通ると天智天皇山科陵の御陵(みかさぎ)に通じるところのことだが、もはや実行する機会はない。アーチ橋では無いが、釧路幣舞橋も好きである。四季を表す美しい4彫像(舟越保武、佐藤忠良、柳原義達、本郷新の作)が立つ橋からの釧路港の夕景は美しい。再び旅に出られるのなら、あと2か所のアーチ橋と大分県訪問で全国旅終了となる。COVID-19の早い終息を祈りつつ、次回のリレー放談は昭和40年卒の廣瀬己良さんにバトンタッチします。